

## 災害ボランティア活動に参加して

農業生産科学科4年 永谷恵理

今年度の新潟県は、主に中越地方で水害・地震といった自然災害が多く発生しました。このような事態を受け、農学部でも何回かボランティアの募集がありました。私は小国町におけるボランティア活動に参加しました。

私にとって、生まれてはじめてのボランティア活動で、その時はいったいどのような活動をしたらいいのかということには分かりませんでした。それでも参加しようと思ったのは、水害直後の三条市内で大量の粗大ゴミの山を目にしたことや、何度か足を運んだ長岡駅の外壁が地震により崩れ落ちる様子をテレビの前で見たこと、そして、一日に何度もテレビ画面に表示される地震情報で、2年の間交流を続けてきた小国町の震度が表示されたことが大きな要因で、それらを見る度に、こんなに近くにいるにもかかわらず何もしないで時を過ごしてしまっているのか、という思いが強かったからです。

しかし実際に現場に行ってみると、私自身が思い描いていたようにはいかず、歯がゆい思いをすることもありました。例えば現地での活動内容が、水害ではU字溝の泥上げ、地震では崩れた建物内部の片付け作業をいう、どちらも力仕事メインだったため、男性に頼らざるを得ないことがいくつもあり、その度に申し訳ないという気持ちになったり、足手まといになってしまっているのではないかと不安がたいへん大きかったように思います。

また、地震でのボランティア活動では初対面の方のお宅の片付け作業であったので、相手の方に掛ける言葉一つをとっても相手の置かれている状況ができる限り理解し、言葉では表さない相手の気持ちを推測して相手を傷つけることがないように努めなければならぬので、難しいことだと感じました。

このように、初のボランティア活動は、小国町の

方々の元気そうな姿を確認できたことを除けば、課題の多いものとなってしまいました。それは私の中でボランティアの良いイメージが先行していたからかもしれません。今回のように、以前から付き合いのある地域にボランティア活動に行くのであれば、顔見知りの方もいらっしゃるし、比較的活動をしやすい環境といえると思いますが、今後もし、全く付き合いがないような地域に行き活動をするのは難しいように思えました。

初めて出会う人の中でボランティア活動をするうえで、相手と自分の間にある、見えない壁がいったいどのくらいの大かさなのか、厚さなのか、硬さなのかを見極めながら、それが徐々に取り除かれていくように努めていくことが必要になると思います。それができなければ、互いが相手の気持ちのどこまで踏み込んでしまっているのか分からず、お互いがお互いに遠慮しあってしまって、互いに満足できる結果にはならないと思います。そのためには、1回や2回足を運ぶのではなく、災害後のできる限り早くに現地に行き、できるだけ長期間活動を続けることが必要なのではないでしょうか。

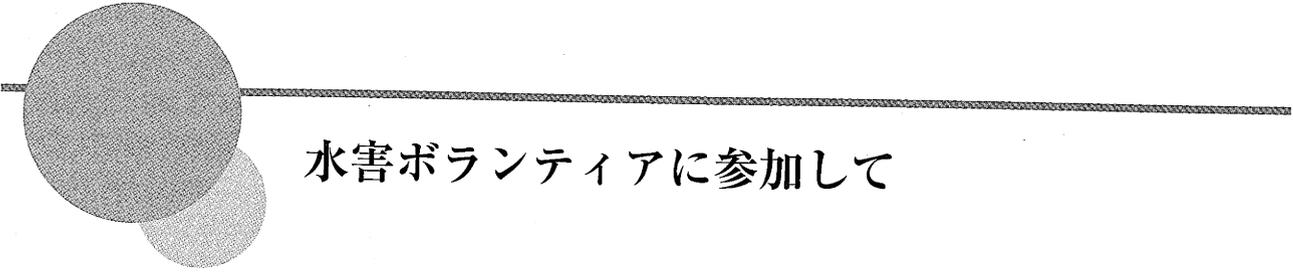
このようなことを考えると、もし今後、新潟県内で災害が発生した場合、新潟大学といった地元の大学が果たせる役割は大きいのではないかと思います。例えば、個人でボランティアに行き、何日間も活動に従事するのは時間的な制約が大きく、なかなか実現可能だとは思えませんが、新潟大学、その中でも農学部といういわば1つの団体として参加し続けたならば、毎回のメンバーは変わったとしても、長い期間にわたって活動が続けられ、また多くの学生にとっても、貴重な経験を得る機会が増えるように思います。

これから社会人となれば、時間的な制約が多く、心に思っても、ボランティア活動に参加できる機会

はほとんどなくなるとは思いますが、今回の活動を通じて、災害にあわれた方々の前向きな姿に心を打たれるのと同時に、謙虚さを持って、相手の気持ちを考えて行動することの重要性を改めて感じるこ

できました。

災害に遭われた方々の一日も早い復興を心からお祈りいたします。



## 水害ボランティアに参加して

農業生産科学科3年 広本亜未

私は水害の影響を受けた小国町の森光でのボランティア活動に参加した。用水路の土や石をスコップで掻きだす内容だった。真夏の昼間で、水分を含んだ土はかなりの重量があり、なれない作業になかなか作業がはかどらなかった。この日は午前と午後に数時間ずつ、途中昼に休憩をはさみ作業した。

実質作業時間はあまり多くなかった。あまり役に立てなかったような気もする。ただ、ボランティアに行き、森光の人たちとコミュニケーションをとったり、水害の影響を受けた水田の様子を実際に自分の目で見ることは大変価値があったと思った。

森光の人たちはとても明るく私たちを迎えてくれ、作業を一緒にしたり、スイカなどを用意してくれていたりと、かなりもてなしてもらってしまった(とてもうれしかったが)。また、水害後の水田の様子を自分の目で見ることは、テレビや新聞で知る様子よりさらにその深刻さがわかり、貴重な体験だと思った。

このように、私たちのボランティア体験はボランティアとしてはあまり仕事をしていないが、現地の人たちの様子を見ることは、ボランティアに参加する意義があると思った。

他学部の友人は個人で一般に募集しているボランティア活動に参加したそうで、その内容を聞いた。

その友人は、長岡市内で浸水した家屋に消毒剤をつける作業を行ったそうだ。

浸水した家屋は夏の高温もあり、腐敗したような臭いがきつく、大変な作業だったということだ。また、浸水した家屋の様子は仏壇や家具などが倒れていてひどいものだったそうだ。

そういう話を聞くと、自分の体験がボランティアと言えるほどのものなのか、という疑問がわく。友人は自発的にボランティアに参加したいと思い、そういうところを探して何度も参加していた。私が行ったのはもちろん自分の意思だが、きっかけは誘われたからであり、声をかけてもらわなかったら参加していなかった気がする。ただ、私のように行く気持ちはあるが、自分で行動を起こすほど行動的ではない人は多いと思うので、そういう人が参加するきっかけになるような機会を与えてもらったことには大変意義があるように思う。

今回のような機会は、ボランティア参加の間口を広げてくれると思う。ボランティアの間口は狭いわけではないのだが、気持ちの面で個人的には参加しづらいイメージがあった。一人で連絡して、一人で現地に行き、というように、やるべきことが多いイメージがあるのだ。今後、もし災害などが起こることがあるなら(起こらないでほしいが)、今回のような機会があると良いなと思った。